

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：27104

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17189

研究課題名(和文)ネパールの男児選好にみるジェンダー、カースト・民族、機能分化的社会関係

研究課題名(英文) Socio Economic Factors on Son Preference in Nepal: An Analysis of Gender Caste, Ethnicity and Modern Social Relation

研究代表者

佐野 麻由子 (SANO, Mayuko)

福岡県立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：00585416

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ネパールを事例に男児選好の促進/抑制要因を解明することにあつた。2016年10月～2017年3月に実施した質問紙調査の分析から、男児選好の促進要因として、息子への財政的支援や老後の保障としての期待、地位の象徴的上昇を、抑制要因としてより高い社会的・経済的地位に昇りつめよつとする姿勢である「社会的地位の上昇志向」を挙げた。そして、地位の象徴的上昇のための男児選好は格差が存続する限り消えないものの、財政的支援や老後の保障を理由にした男児選好は、社会状況の変化に伴い緩和される、業績主義への移行により属性に規定されずに自己実現が可能になった際に、男児選好が弱まるとした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the promotional factors of son preference, such as the interruption of the female fetus, in Nepal. In 2007, it was estimated that around 100,000 girls were "missing" in Nepal. Earlier studies reveal the correlation among property, savings, educational level, and preference for sons. Author analyzed the correlation between class consciousness and son preference using the data of the questionnaire survey conducted from October 2016 to March 2017.

The results show that (1) Greater expectations for sons to provide financial support and social security and to inherit assets strengthen son preference, (2) Seeking upward mobility by emulating the rituals and practices of the upper castes strengthen son preference, on the contrary, (3) The experience of the social shift towards meritocracy, such as, being released from their status, freed from traditional constraints, and a broadening of their life choices, weaken son preference.

研究分野：社会学

キーワード：男児選好 ネパール 社会的地位の上昇志向

1. 研究開始当初の背景

ネパールでは、性の選択による中絶で生まれることができなかつた女性や育児放棄等で生きることができなかつた「失われた女性たち (missing women)」が、2007 年時点で女性の総人口の約 1% を占めるといわれる (UNDP 2010)。さらに、中間層において性の選択が実際に行われているとの推測も出されている (The Kathmandu post 紙 2012 年 11 月 29 日)。ネパールでは、「人間開発指数」が改善されたにもかかわらず (UNDP 2013)、男女の出生比率の偏重、女性の生存確率の低さといった問題が生じるのはなぜか。仮に生活にゆとりのある中間層で性の選択が行われているとすれば、その理由は何にあるのか。

本研究に先駆けて、2013 年に研究代表者が実施した首都他 7 県在住の 2000 名を対象にし 1940 名より回答を得た質問紙調査の結果からは、市場化・準市場化が、収入 (経済資本) や土地、学歴 (人的資本)、困ったときに頼れる家族以外の人 (社会関係資本) をもたない人の男児選好を促進することがわかった。さらに、(1) 他の世帯と比較して生活水準が下位にあると感じる人、過去と比較して世帯の経済状況が上向いた人、生活水準を改善する機会が十分にあると思う人ほど、男児選好的である、(2) 過去と比較して世帯の経済状況が悪化した人、生活水準を改善する機会が十分でないと思う人 (諦念が強い人) ほど、男児選好的でない、という知見より、「階層の上昇移動を経験した人ほど、当該社会において優勢な生存維持戦略 (男児への投資) をとる」、逆に、「下降を経験した人、長期的に上昇の機会を得られていない人ほど男児選好的にならない」という知見を得た。仮に、男児選好が過去と現在の生活水準の比較、他者との生活水準の比較に影響を受けるものだとすれば、ジェンダー、および、カースト・民族、階級における上位、中位、下位層の相対的剥奪観や相対的上昇観、諦念の内実を明らかにし、それらがどのように人々の生計戦略に影響を与え、結果として男児選好の促進 (逆に、抑制) につながっているのか。その構造的背景を明らかにすることが、「失われた女性」の解明に緊要であると認識し本研究の課題設定に至った。

なお、先行研究においては、男児選好を促進する経済的要因として、世帯所得や世帯の所有する資源の欠乏 (G.Clark 2008)、男女の経済的価値に影響を与える労働市場 (N.Qian 2008; R.Jensen 2010)、福祉サービスの商品化の度合い (A.Sen 1990) が、文化的要因として婚資の慣習、家督相続の制度 (A. Sen 1990)、家父長制度や家父長制的法制度 (M.Das Gupta 2009) が提示されているが、本研究では「資源の多寡」だけではなく、他者との生活水準の比較による剥奪感、過去と現在の生活水準の比較による上昇感が、男児選好の促進要因として重要であるという立場にたった。

2. 研究の目的

先述の問題関心より、本研究では、(1) 相対的剥奪感、相対的上昇感が男児選好の促進要因となる、逆に、諦念が男児選好の抑制要因になるという仮説を検証し、男児選好の促進/抑制要因を明らかにすること、(2) 上述 (1) の分析を通して、男児選好の促進につながる相対的剥奪感、逆に、抑制に作用すると思われる諦念を生み出すネパールの今日のジェンダー関係、カースト・民族間ヒエラルキーの再編関係、機能分化的社会関係の進展度合いを明らかにすることを研究目的とした。

3. 研究の方法

3.1. 調査方法：聞き取り、質問紙調査

研究の方法として、聞き取り調査および質問紙調査を採用した。質問紙調査に先駆けて実施した聞き取り調査では、機縁法により A 病院産科病棟の関係者を含む 23 名から男児選好の実態等について話を聞いた。質問紙調査では、調査対象としてネパールの首都カトマンズ、全国的にも出生時性比の偏重が顕著だったラリトプール、バクタブルの他、シンドゥパルチョーク、カブレ、ヌワコット、ラスワ、ダディンの計 8 郡から成るバグマティ・ゾーンを選定し、同地域に居住する調査当時 18 歳以上 70 歳未満の男女を調査対象とした。統計的な見地にたち計画標本規模を 2500 としたが、結果として 2589 名から回答を得ることができた。調査地点の選定にあたっては可能な限り無作為抽出を行った。具体的には、バグマティ・ゾーン下の 8 郡から確率比例抽出法で無作為抽出を行い、ネパールの行政区分である「村落開発委員会 (VDC)」を選定した。また、重複して複数回選ばれたカトマンズ、マデャブル、バクタブルの各 VDC についてはさらに無作為抽出を行い、VDC よりも小さい行政区分である ward を選定し調査地点を設定した。

3.2. 質問項目の設定

男児選好をはかる質問項目については、娘よりも息子を好む選好 (理想の性別構成、娘・息子への価値認識、息子の必要性、必要と思う理由)、他者からの圧力 (息子を得ることへのプレッシャー)、行動 (性別判定の受診、判定後の中絶の有無) の 3 つに分けた。

4. 研究成果

4.1. インフォーマントの概要

2589 名の回答者の内訳は、男性 1036 人 (40.0%)、女性 1551 人 (60.0%) で女性がやや多い。カースト・民族については、上位カーストのブラーマン 382 人 (14.8%)、チエトリ 549 人 (21.3%)、統一以前からカトマンズ盆地で王国を築いていたネワール民族 788 人 (30.5%)、ジャナジャティと呼ばれる少数民族 690 人 (26.7%)、ダリット (虐げられた人の意) と呼ばれる低カースト 126 人 (4.9%)、その他 48 人 (1.9%) であ

る。婚姻関係については、既婚は 2063 人 (79.8%)、未婚が 360 人 (13.9%) である。年齢構成は、10 代が 96 人 (3.8%)、20 代が 624 人 (24.4%)、30 代が 676 人 (26.4%)、40 代が 655 人 (25.6%)、50 代が 309 人 (12.1%)、60 代が 199 人 (7.8%) で、20 代～40 代が多くなっている。

4.2. 単純集計にみる男児選好の傾向：全体として平等志向

理想の子どもの性別構成について息子と娘の数を同数とする平等志向が 61%、男児選好が 24%、女児選好が 8% で、6 割が平等志向であることがわかった (n=2555)。「娘しかない人は不幸だ」、「息子がいないのは悪い業や道徳心のなさによる」、「息子だけが儀礼をすることができる」、「娘からの財政支援を受けてもよい」という質問項目で男児選好的な回答の得点を合計した男児選好スコアについては、低スコアの人が 68.2%、中スコアの人が 15.8%、高スコアの人が 16.0% で、全体的に男児選好スコアの高い人の割合は少なかった (n=2575)。

他方で、息子の必要性を感じている人は回答者において 4 割程度おり、性別判定を行ったことがある人は 20.2% (n=1145) であった。ネパールでは性別を理由にした中絶は法律で禁止されているが、性別判定の結果中絶をしたと回答した人は 16.6% であった (n=1935)。息子が必要な理由としては、「家系の維持」(65.2%)、「老後の保障」(41.1%)、「葬式の喪主」(39.1%)、「財政的支援」(31.0%)、「財産相続」(21.3%)、「威信と力の誇示」(9.6%) 等が挙げられた (n=2581)。「葬式の喪主」とは、火葬の際に、遺体に火をつける等の宗教儀礼を行うことを指す。

4.3. 仮説の検証：相対的剥奪、諦念の強さが男児選好の促進要因となる

「相対的剥奪感が男児選好の促進要因となる」という仮説については、理想の子どもの性別構成、男児選好スコア、性別判定後の中絶、息子の必要性、息子を生むプレッシャーについては相対的剥奪感の強弱で有意差はなかった。しかし、相対的剥奪感が強い人ほど、「老後の保障」、「財政的支援」、「家系」、「葬式の喪主」、「財産相続」という理由で男児を選好することがわかった。また、相対的剥奪感が強い人ほど、性別判定をしていることがわかった。

「諦念が男児選好の抑制要因になる」という仮説については、理想の子どもの性別構成、男児選好スコアについては相対的剥奪感の強弱で有意差はなかった。他方、息子が必要な理由については、仮説とは異なり、諦念が強い人ほど、「財産相続」、「財政的支援」、「葬式の喪主」、「威信と力の誇示」という点から男児を選好することがわかった。また、諦念が強い人ほど、息子を得るプレッシャーを感じ、性別判定、性別判定後の中絶を行う傾向

にあることがわかった。

相対的剥奪感が強い人は、学歴が低い人、所有している土地が狭い人、他の世帯よりも生活水準が低いと感じている人において多い。また、カースト・民族においては、ジャナジャティ、ダリット、ブラーマンの順に多い。

生活改善の機会についての諦念が強い人は、収入が低い人、所有している土地が狭い人、学歴が低い人において多い。また、カースト・民族においては、チェトリ、ネワールにおいて高いことがわかった。

4.4. 仮説以外の促進/抑制要因の発見

(1) 階層と男児選好

申請時の仮説の他に、インドの研究者バラとカウル (Bhalla and Kaur, 2015) の「階層が上昇するにつれ男児選好は薄れる」という仮説から着想を得て、階層と男児選好との関係について分析を行った。

バラとカウルは、インドの人口動態データをもとに人々が貧困層から新興中間層、中間層を経て上層へと上昇するにつれ選好が薄れ、性比の偏りも収束すると予測した。彼らによれば、4 つの階層のうち男児選好が強いのは貧困層と新興中間層であるが、貧困層はそれを実現する資源をもたず、ある程度の経済的余裕をもつ新興中間層になって性別判定や女児の中絶を行うため、新興中間層の数に比例して男児選好が顕著になるという。そこで、『世界価値観調査』に依拠して、低層階級 (lower class)、労働者階級 (working class)、下層中間階級 (lower middle class)、上層中間階級 (upper middle class)、上層階級 (upper class) の階級自認別に男児選好スコア、性別判定後の中絶経験を尋ねた。分析の結果、「娘しかない人は不運だ」、「息子がいないのは業や不道徳故である」、「息子だけが祖先の祭祀を執り行うことができる」等の質問項目で測られる男児選好スコアが高得点だった人の割合は、労働者階級と低層階級で高く、性別判定をした人の割合も低層階級で高い。しかし、興味深いことに性別判定後に中絶した人の割合は、バラとカウルの予測とは異なり、ネパールでは上層中間階級で最も高いことがわかった。

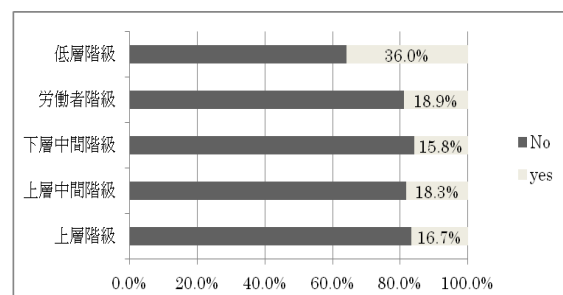


図1 階層自認別性別判定

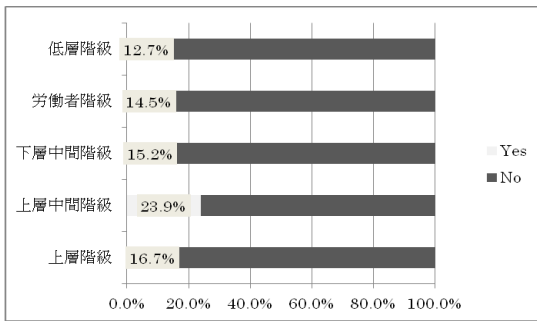


図2 階層自認別性別判定後の中絶

学歴、所得、カーストが高い人ほど上層中間階級や上層階級を、低い人ほど低層階級や労働者階級を自認する傾向がみとれることから、学歴、所得、カーストが比較的高い人が、性別判定や女兒の中絶を行っているという推測することができた。なお男児を選好する理由については、「家系」を除き、上層中間階級よりも、労働者階級や低層階級ほど「財政的支援」、「老後の保障」、「財産相続」を挙げる傾向にあった。

ここから労働者階級、低層階級においては財政的支援への期待、老後の生活保障としての期待、財産を継承させるといういずれの理由からも男児を選好する傾向にあるものの、中絶の費用や医療機関へのアクセス等の実現可能性が低く、結果として中絶には至っていない。他方で、上層中間階級では、家系の維持を理由に男児を選好し、それを実現させる資源をもつ結果、中絶に至った割合が高くなっていると考えることができた。

(2) 上層階級で男児の必要性が弱まる理由：経済的安定、社会的地位の上昇志向

上層階級においては「財政的支援」、「老後の保障」という点での息子の重要性は低い点について考察を行い、その理由として、息子に頼らずとも自活できる資源があること、選好に陥らない新しい価値志向をもつという2つの知見を導いた。

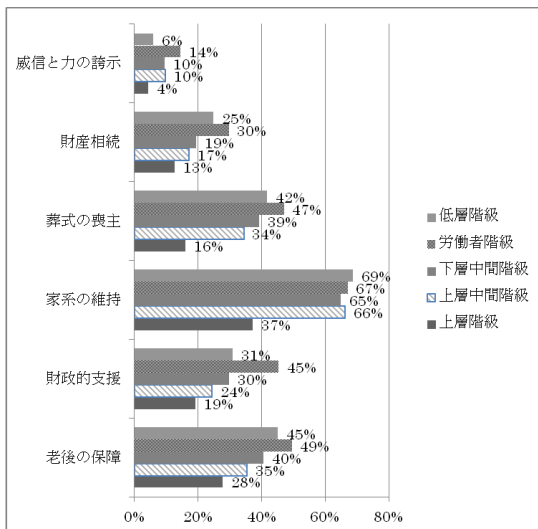


図3 階層自認別息子が必要な理由

1 点目の「財政的支援」、「老後の保障」と

いう点での息子の重要性は、私財があれば、薄れていく。近年ネパールでは、核家族化が進み、大家族において年老いた両親の世話をするという状況にも変化が生じている。新聞広告等では、富裕層向けの介護ヘルパーの宣伝もみられるようになった。一部の階層においては「介護という家族機能」の外部化もみられる。では、家系の維持についてはどうか。息子が必要な理由として「家系」を挙げた人の割合をみると、最も高かった低層階級と上層階級との間には、30ポイント以上の開きがあった。また、「家系」を確認する機会となる「葬式の喪主」についても、上層階級でそれを挙げた人の割合はわずかに16.0%で、労働者階級との間に30ポイント以上の開きがあることから、上層階級においては家系という点でも息子に拘泥しない姿勢が読み取れた。

2 点目について、調査から明らかになった点は、自認する階層が上昇するほど、「社会的地位の上昇志向 (upward mobility)」が高く、「社会的地位の上昇志向」の高い人ほど男児選好が弱いことである。「社会的地位の上昇志向」とは、「より高い社会的・経済的地位に昇りつめようとする姿勢」のことで、世界価値観調査では、それをはかる尺度として「思い通りの人生の選択ができていう全能感」、「競争はよいという競争主義」、「成功はコネクションよりも勤勉さによってもたらされるという業績主義」が設定されている。ネパールでも同じ設問を用いて調査をしたところ、「社会的地位の上昇志向」が高い人ほど、男児選好スコアが低く、男児を生むプレッシャーを感じた人の割合や女兒を中絶した人の割合が低いことが確認できた。

「社会的地位の上昇志向」スコアが高い人の割合は、経済的、社会的に優位にある上位カースト(ブラーマン、チェトリ)において高く、低カーストにおいて低い。所得グループをみると、所得下層、中間層、上位層の3つの所得グループのうち、社会的地位の上昇志向スコアが高い人の割合は、中間層において最も高く、最下層において最も低かった。また、学歴や自認する階層が高い人ほど、「社会的地位の上昇志向」スコアが高くなる傾向にあった。「社会的地位の上昇志向」は、市場経済化と民主化の進展による属性主義から業績主義への制度的転換、それに伴う価値観の変容と関連していると考えられる。その中で、属性からの個の解放、伝統的束縛からの自由、人生の選択の幅の広がりを実感できている人は、結果として男児選好を薄める平等主義、個人主義的価値観をもつようになる。上層階級では、所得に裏打ちされた経済、老後の保障面での男児選好の薄れだけでなく、社会が業績主義へと移行する過程での実感が男児選好を弱めていると考察することができた。

(3) モンゴロイド系民族で男児選好が強化

される理由：経済的戦略・ブーラン化

これまで、カースト・民族と男児選好との関係については、ネパールの支配層を占めるブーラン、チェトリ等のヒンドゥー教徒ほど信仰が篤く家父長制的ジェンダー規範が強いことから男児選好が強いとされてきた。しかし、調査で明らかになったことは、家父長制的ジェンダー規範が弱いとされてきた主に仏教を信仰するモンゴロイド系民族において男児選好スコアの高得点者の割合が相対的に高く、性別判定や女児の中絶をした人の割合も一定程度いるという点であった。この点について、経済的戦略、「地位の象徴的上昇（ブーラン化）」という2つの点から考察した。

1点目について、息子を重視する理由をみると、モンゴロイド系民族ほど、「老後の保障」という理由から息子を重視していることがわかった。今回の調査での所得分布をみると、モンゴロイド系民族において所得下層に位置する人の割合が、低カーストに次いで2番目に高いことがわかった。所得下層者の割合が最も低かったネワール民族と比べると20ポイント近い差がある。また、「ネパールの一般的な世帯に比べて生活水準が低い」と回答する人の割合も高く、ネワール民族と10ポイント以上の差がある。ここから、モンゴロイド系民族は、息子に老後の面倒を期待する状況に置かれていることが推察できた。

2点目について、「地位の象徴的上昇（ブーラン化）」という点から考察を行った。カーストの上位にいるブーランの慣習を真似て象徴的地位を上昇させるという意の「ブーラン化」という鍵概念は、2016年9月に産婦人科専門病院のG医師への聞き取りの中で、G医師がモンゴロイド系民族において男児選好がみられるようになった理由として挙げた語である。ブーラン化は、子どもの性別だけではなく、モンゴロイド系民族においてそれまであまりみられなかった新婦の側が新郎の側に支払うダイジョ（婚資）の“流行”においてもみられることが、聞き取り調査から明らかにされた。

4.5. 研究のまとめ：男児選好の未来予測

階層別、カースト・民族別の分析から、男児選好の促進要因として挙げられたものは、(1) 経済的な支援としての息子への期待 - 財政的支援、老後の保障としての期待 -、(2) 「地位の象徴的上昇（ブーラン化）」であった。

(1) について、ネパールでは人口のおよそ45%が貧困層、31%が貧困層を脱しつつあるものの脆弱性が高い層といわれている（World Bank, 2016）。貧しい76%の人々が上層に登りつめ、経済的支援、老後の保障において息子を頼らざるを得ない状況を抜け出すことができたときに、性別の偏りはなくなると想定できた。

(2) について、「地位の象徴的上昇（ブー

ラン化）」は、所得が上昇し一定の生活水準を確保できたとしても、相対的な格差が続く限りは、残り続けると想定できた。特に、「相対的剥奪感」を強く抱いている低カーストや少数民族においてこうした構造的圧力が働くことが考えられる。

他方で、男児選好の抑制要因として注目できるのが、「より高い社会的・経済的地位に昇りつめようとする姿勢」である「社会的地位の上昇志向」であった。属性主義から業績主義への移行の中で属性に規定されずに自己実現が可能になるという状況を多くの人たちが享受できるようになれば、子どもの性別への固執も弱まり男児選好は収束に向かうという予想をたてることができた。

これらの知見は、資源の多寡と男児選好との関係を論じる既存の研究に対しては、(1) 生活実感や社会変化の中の価値志向が男児選好の規定因になること、(2) 従って、階層別（カースト・民族、階級関係）の男児選好の構造的圧力を解明することの重要性を提示した。また、「階層が上昇するにつれ男児選好は薄れる」という仮説を提示したインドの研究者バラとカウル（Bhalla and Kaur, 2015）に対しては、階層が上昇するにつれ男児選好が緩和される理由として、世帯の経済的戦略の変化とともに、「社会的地位の上昇志向」という要因があることを新たに提示した。

4.6. 今後の課題

本研究では、ネパールにおける男児選好の促進要因を解明することを主たる課題として設定したが、研究の過程で、所得国別の男児選好の動向を分析したところ、出生時性比の偏りは、1990年を境に高所得国や低所得国よりも経済成長率の高い上位中所得国および下位中所得国において高くなる傾向にあることが確認できた。ここから、男児選好は経済の過渡期的発展段階に特有の現象ではないかという仮説を導くことができた。そこで、今後は、経済の過渡期的発展段階と男児選好とはどのような関係にあるのか、階層移動と男児選好はどのような関係にあるのかを分析し、階層別に作用する男児選好を促進する構造的要因を明らかにしたい。具体的には、以下2点を研究課題として挙げる。

(1) 先進国（日本）における子どもの性別選好の動向の分析

マクロデータ等を用いて、戦後から高度経済成長期を経て現在に至る日本の構造転換と性別選好との関係について分析し、文化横断的なマクロな視点から過渡期的発展段階と男児選好との関係を明らかにする。

(2) ネパールにおける階層別の子どもの性別選好とその構造的背景の分析

今回の調査で用いた(1) 家族集団の世代間の継承に関わる戦略 誰の血筋によって家族集団を組織するのか、財産や地位を誰に引き継ぐのか、(2) 家族集団の経済的

戦略 子どもへの労働力としての期待、生計の保障としての期待という視点の他に、(3) 家族集団と個との関係 - 性、セクシュアリティ、ロマンティックラブ、(4) 「社会的地位の上昇志向」と関連する創造的個人主義 - 個人に価値を置き、個人の資質と能力の昇任に基づく集団を構成しようとするあらゆる価値 (Baudelo・Eatable 2008 = 2012) という点から、階層移動と男児選好との関係について明らかにし、文化横断的な知見を提示したい。

< 引用文献 >

Bhalla, Surjit S and Kaur, Ravinder, 2015, " Financial Express Column: No proof required; The end of the son preference begins The rise and fall of the emerging middle-class mirrors changes in the sex ratio at birth " .

Christian Baudelot and Roger Establet , 2008 , *Suicide: The Hidden Side of Modernity* , Polity (= 2012 , 山下雅之 ・ 都村聞人 ・ 石井素子訳 『豊かさの中の自殺』藤原書店 .)

Clark, Gregory, 2008, *A Farewell to Alms: A Brief Economic History of the World* , Princeton University Press (= 2009, 久保恵美子訳 『10 万年の世界経済史』日経BP社.)

Das Gupta , Monica, 2009 , *Family Systems, Political systems, and Asia 's 'Missing Girls ' :The Construction of Son Preference and Its Unraveling* , The World Bank Development Research Group Human Development and Public Services Team.

Jensen, Robert, 2010, " Economic Opportunities and Gender Differences in Human Capital: Experimental Evidence for India, " NBER Working Paper W16021.

Qian, Nancy, 2008, " Missing Women and the Price of Tea in China: The Effect of Sex-Specific Earnings on Sex Imbalance, " *The Quarterly Journal of Economics*, 123 (3): 1251-1285.

Sen, Amartya, 1990, " More than 100 million Women are Missing, " *New York Review of Books*, 37(20).

5 . 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

佐野 麻由子、「ネパールにおけるジェンダー、カースト・民族、階級関係：男児選好の促進要因の考察から」、単独、2016年10月1日、第三回アジア未来会議、北九州市立大学北方キャンパス。

〔図書〕(計1件)

佐野 麻由子、「現代ネパールと開発問題」、渋谷淳一・本田量久編、『21世紀国際社会を考える：多層的な世界を読み解く38章』、旬

報社、2017、238 - 247.

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

佐野 麻由子 (SANO, Mayuko)
福岡県立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：00585416